

会 議 録

会議名	平成21年度第5回 八王子市市史編集委員会	
日 時	平成22年3月7日(日)午後2時～午後4時20分	
場 所	八王子市市史編さん室	
出席者氏名	委員	藤田覚委員長、新井勝紘副委員長、相原悦夫委員、畔上能力委員、 関和彦委員、前田成東委員、松尾正人委員、光石知恵子委員
	説明者	佐藤広市史編さん室長、新井雅人市史編さん室主幹
	事務局	(説明者のほか) 福田美和子市史編さん室主任、 渡部恵一市史編さん室主事、押田佳子市史編さん専門員、 白石烈市史編さん専門員、中村元市史編さん専門員、 柳沢誠市史編さん専門員
欠席者氏名	池上裕子委員、小川直之委員、	
議 題	1. 事務報告 2. 専門部会の活動状況について 3. 平成22年度の事業について 4. 『市史研究』の刊行について 5. 市民協働について 6. その他	
公開・非公開 の別	公開	
傍聴人の数	なし	
配付資料名	資料1 市史編集専門部会調査活動報告 資料2 平成22年度市史編さん室事業予定表 資料3 『市史研究』の発行について(素案) 資料4 市史編さんにおける市民協働について(素案) 事務報告資料(掲載省略)	

会議の内容

1. 開会

【藤田委員長】それでは第5回編集委員会を開会する。池上委員、小川委員から欠席の連絡があるが、出席8名で会議は成立している。

2. 事務報告

【藤田委員長】それでは次第にそって進める。まず事務局から事務報告がある。

【新井主幹】まず、基本構想及び編集方針の決定について報告する。基本構想については昨年度から市史編さん審議会で、編集方針については今年度、この編集委員会で検討いただき、その後所定の手続きを進めてきたが、昨年12月1日付で正式に決定した。これで、市史編さん事業の基本となる考えができあがったことになる。この考え方にに基づき、事業を進めていきたいのでご協力をお願いしたい。

続いて、法政大学多摩図書館との連携について報告する。法政大学とは場所的にも近いということで何らかの連携ができないかと考えていたが、このたび法政大学多摩図書館と連携を結ぶことができた。内容は、市史編さん室の職員に対し法政大学図書館の利用カードを交付してもらい、職員が大学図書館を利用できるようにするというものである。通常の市民利用では利用できない閉架書庫内にも入らせてもらえるという計らいをされている。法政大学との連携を例として、今後も市内の大学との連携を図っていきたい。

次に、市史編さん室だより「稻荷山通信」第4号であるが、ここで発行することとなった。来週以降に順次配付する予定である。

4点目は市民講座の開催についてである。法政大学大原社会問題研究所にも協力いただき、市民向けの講座を開催している。すでに2月26日から行っているが、毎週金曜日に4回連続で開催する予定である。30名の定員で募集したところ42名の申し込みがあり、好評と考えている。

最後に自然部会の粕谷和夫委員に協力いただき、市史編さんの一環として、八王子の身近な歴史や自然に触れていただくための事業として野鳥観察会を予定した。開催日は本日の午前中だったが、残念ながら荒天のため中止となった。また4月以降に時機を見て開催したいと考えている。

【委員】法政大学図書館の利用については、編集委員や専門部会の委員なども利用できるのか。

【新井主幹】現段階では、市史編さん室の職員について利用を認めてもらっている。編集委員などの利用が必要であれば、大学図書館と調整したい。

【委員】市民講座の定員は30人だが、我々が聴講することは可能か。

【新井主幹】申し込みが多かったこともあり、広い会場を用意してあるので、対応可能である。

【委員】稲荷山通信だが、年号表記は基本的に元号表記になっている。どこかに西暦表記を入れたほうがいいのではないか。特に表紙の年号のところは括弧書きでもいいので西暦表記をしてほしいと思う。

【藤田委員長】その点については、事務局にお願いしたい。

3. 専門部会の活動状況について

【藤田委員長】それでは、次の専門部会の活動状況に移りたい。各部長から部会の活動内容、活動の中で出てきた問題などを中心に簡潔に説明願いたい。

【委員】原始・古代部会では、資料編の刊行に向けて順調に進んでいる。資料編は考古資料を中心に遺跡を紹介していくので、横書き、大きめの判型で考えており、膨大な数の遺跡を仕分けし、どの遺跡をどのくらいのページ数で紹介するかという議論まで進んでいる。今後は執筆担当を決定し、資料編の執筆活動に入っていきたい。また、2月から旧石器時代を担当してもらう部会委員を1名追加した。

【新井主幹】中世部会の池上部長が欠席なので、事務局から報告する。中世部会では資料編刊行が平成25年であり、まだ資料編の具体的な内容の検討までは進んでいない。今は地域調査、文書調査を中心に活動している。近いうちに部会会議で、資料編の組み立てについて検討を始める予定である。

課題としては、北条氏照の文書をどうか扱うかということがある。他の自治体史などでも氏照文書は取り上げられているが、八王子の市史としてどの程度氏照文書を取り上げるのか、場合によっては氏照文書全てを収めた資料集を刊行する必要もあるのではないかと議論がある。

【藤田委員長】それでは近世は私から報告する。現在は、市内の文書の所在調査を行い、借用できた文書について目録を作成している。また、八王子周辺の自治体史から八王子に関する資料を抜き出すという作業も行っている。それに伴い、静岡県蕪山の江川文庫に史料調査に行き、八王子関係の文書を収集してきた。

調査の過程で、市内に検地帳と村明細帳がかなり残っていることが分かった。検地帳は江戸時代の村のあり方を伝える基本的な史料であるが、天正19年のものが一番古く、そのほかに慶長期のものがあり、寛文検地と呼ばれる寛文期のもものが一番多く残っている。またもうひとつ、江戸時代の村のあり方をよく伝えるものが村明細帳であるが、これもかなり多くの量が残っている。これらは基本的な史料なので資料編に掲載したいのだが、とても全部は収まりきらない。そこで資料編ではなく、検地帳集成、村明細帳集成という形で別途刊行できないかという意見も出ている。予算もかかることなので事務局と相談しながら実現したいと考えている。

それから、本編、資料編を考えるうえで、そろそろ具体的な構成を考えなくてはならないのだが、史料の量が膨大でまだ具体的な構成を考えるに至っていない。今後、本編、資料編の柱になるような事項について勉強会を行っていかうという計画になっている。

【委員】近現代部会では、比較的早い時期に資料編の刊行が予定されており、資料編の第1冊目は旧町村の行政文書を中心に編集することが決定している。これまで十分に取上げられてこなかった文書なので、重要な資料として資料編に掲載するものを部会委員が選択しているところである。どういう基準で選択するかという議論もあったが、この後刊行する本編との関係で重要となる資料を意識して選択するようになると思う。

課題としては、現代史をどこまで対象とするかということがあり、まだ十分に議論していない。また、我々の先輩の研究者の方々が市内には多くいらっしゃる。そういう方々のご意見を伺うため、座談会のようなものを行いたいという意見が出ている。なかなか実現できていないが、そういう機会を作りたいと思っている。

【委員】自然部会では、この間2回の会議を行った。ただ、地学系や魚、菌類など、まだ人選ができていない分野もあるので、今後努力していきたい。課題としては動植物の分類という問題がある。今、国際的にはDNAを中心とする分類方式に移行しようとしている時期であり、これにどう対応していくか考えなくてはならない。現在、東京都でRDB調査を行っているが、その際東京都がどのような手法をとるかにより八王子市としての手法も変わってくるのかと思っている。

【新井主幹】小川部会長が欠席のため、民俗部会については事務局から報告する。民俗部会では平成28年度の本編刊行に向けて、地域別調査、テーマ別調査の2つの手法で調査を行っていきたくて考えている。地域別調査の成果については本編とは別に調査報告書という形にして5冊程度刊行したいということである。来年度は地域別調査として恩方地区を取り上げて調査しようという意向である。

【佐藤室長】各部会の調査も本格的になってきたというのが事務局としての実感である。今後の部会活動に関して事務局から話をしたい。近世部会や民俗部会で報告があったが、本編、資料編以外の報告書等の刊行が各部会での課題となってきた。各部会で判断して刊行が必要となれば事務局でもそれに向けて努力したいと思っている。

これから資料編の刊行ということになるが、そうすると全体としての編集上の課題が見えてくる。市史の名前をどうするのか、例えば「新八王子市史」とするのか。体裁を整える、デザインを統一するということも必要になってくる。また、考古学の手法による資料化は原始・古代部会だけでなく他の部会にも関係することであり、少し時間をかけて調整したいと思う。

今後、資料編、本編の構成も各部会間で調整していく形になると思うので、部会を超えた活動を担保していく形を取る必要があると考えている。

4.平成22年度の事業(部会活動等)について

【藤田委員長】それでは、次の協議事項に移りたい。資料2に基づき、来年度の事業について事務局から報告願いたい。

(配付資料2に基づき、平成22年度の事業予定について説明)

【藤田委員長】来年度の市史編さん室としての事業予定の説明があった。質問等があれば出してほしい。

【委員】先ほどの部会活動の報告とも関係するが、今後は近世部会の江川文庫の史料調査のような出張調査が必要になってくる。近現代部会などは、場合によってはアメリカへ行かなくてはならないかもしれない。しかし予算はなかなか増やせるものではないので、各部会でどのような出張調査が必要か意見を提出し、出張調査の計画を組んでいくことも必要と感じた。

また、近世部会や民俗部会で話が出たが、本編、資料編とは別に調査報告書のようなものを刊行することも非常に大事だと思う。これも予算がかかることなので早めに計画し、本編、資料編の刊行スケジュールとの関わりも含めて議論していかないといけないと思う。

5. 市史研究の刊行について

【藤田委員長】次に市史研究の刊行について、事務局から説明願いたい。

【佐藤室長】資料3をご覧ください。市史研究の発行について素案として示したものである。名称としては「新八王子研究」、A5判の縦書き、150ページ程度である。発行予定は11月下旬を目途としたい。原稿は編集委員の方々に依頼するほか、市民からの投稿原稿もいただく形で進めたい。投稿原稿はそれなりの審査をして選定したいと思っているが、審査はぜひ編集委員会を中心に行っていただきたいと思っている。また、編集はこの編集委員会で編集する形をとりたい。今後、市史編さんが終了するまで毎年1冊づつ、第7号まで刊行の予定である。

次の3ページでは、創刊号の内容の提案をさせていただいている。事前にご相談はしていないが、審議会長、編集委員長にはぜひ一文を載せていただきたいと思っている。できれば特集を組みたいと思い、例として「地方主権時代の歴史編さん」というものを載せてある。そのほか、論文、資料紹介、市史編さんの動き、関係者名簿という形でまとめていきたい。

【藤田委員長】これは全く新しい試みということになるので、いろいろと議論があると思う。まず名称の「新八王子研究」だがどうだろうか。

【委員】あまり賛成しがたい。新しいものはどうせ古くなる。歴史とは動いていくものであるので、そういう名称をつけると陳腐になってしまう。個人的にはあるが「新」には抵抗がある。

【藤田委員長】オーソドックスなのは、やはり「八王子市史研究」だろうか。この名称は編集委員会において決めるということになるのか。

【佐藤室長】市史研究の編集は、この編集委員会をお願いしたいと思っているので、名称も決めていただくのが妥当と考える。

【委員】他市の例では、市民に親しまれるような名称をつけたうえで、サブタイトルとして「市史研究」としているところも多い。この市史研究も市民からの投稿を受け付けたりして市民とのつながりの場となるものなので、全体のイメージとして親しみやすいものがないのではないか。

【藤田委員長】この市史研究では、学問的なレベルを維持することと、市民協働を具体化していくことを両立したいということだ。依頼原稿については専門部会委員など、市史編さんに関わっている方に依頼する。一方で市民協働という考え方を生かす意味で、市民に開かれたページも作るということになる。

【委員】編集委員会で編集するということが、具体的には誰が担当するのか。

【佐藤室長】編集委員3名ほどと事務局2名ほどで作業を進めていけばいいのではないかと考えている。編集委員は毎回同じメンバーではなく、各号ごとをお願いしたい。

【藤田委員長】この編集委員会で責任を持って編集するということが、例えば専門部会長2名で1号を担当するような形で、投稿原稿の審査もそこで行うが、場合によっては部会の委員に読んでもらうこともあり得るようなスタイルになるだろうか。

スケジュールとしては、投稿の呼びかけや原稿の依頼を5月に行い、8月下旬に締め切り、9月に審査して11月に刊行ということになる。

創刊号の内容の素案が資料として出されているが、特集として「地方主権時代の市史編さん」とあるように、今八王子市史を新たに編さんすることにどのような意義があるのかを論じてみたいという趣旨のようだ。具体的に特集の執筆者は考えているのか。

【佐藤室長】今、政府が公文書の保存を進めているが、なぜ行政としてこういう仕事をするのかということ力を説いていきたい。一般に公文書保存に関する議論を見ると、専門の歴史研究者によるアーカイブズ論が多いと感じるが、自治体経営の観点から、こういう歴史編さんにどういう意義があるのかを考えてみたい。例えば、元東京都副知事の青山侑さんなどは自治体研究の傍ら歴史小説なども執筆する幅広い方で、八王子学園都市大学いちょう塾の学長もしていただいているので、もしお願いできればと思っている。

【藤田委員長】創刊号であるから、こういう特集を組むという事務局の案である。そうすると、編集の担当を決めておかないといけないが、原始・古代部会の関委員はどうか。それから特集にも関わるので前田委員にもお願いしたい。

それでは、創刊号の編集体制は原始・古代部会の関委員、特集との関わりで前田委員、それから私も入って3人で組むということにしたい。市史研究の名称については、次回に決めても遅くないことだと思う。

6. 市民協働について

【藤田委員長】それでは、次の市民協働について説明を。

(配付資料4に基づき、市史編さんにおける市民協働について説明)

【藤田委員長】市民協働についての具体的なあり方の提案である。多様な市民との協働のところに顧問、参与、協力員とあるが、どのような役割を期待しているのか。

【佐藤室長】顧問は2、3名前後と考えている。全国的な研究業績のある方には全国的な調査の情報提供や、あるいは地域の研究者のリーダー的な方については地域との関係をスムーズにしていくようなことをお願いしたいと思う。顧問については事務局で何か課題のあるときに相談したり、情報提供をしていただく、参与については年に1回くらい編さん事業の実施状況を報告してご意見をいただくような考えでいる。協力員については部会の調査活動等の中で情報や資料提供などしていただくことを考えている。

【委員】意図は分かるが、この編集委員会との関係という意味ではどうなるのか、少し危惧するところがある。顧問や参与になった方が事業の進め方などに意見を出したりされ、この編集委員界との関係がこじれるようなことにならないか。関係がスムーズに行くならば事業にとってプラスになると思うが。

【佐藤室長】この事業を進めるにあたっては、各専門部会長が自由に発想して進めていく形を尊重したいと思っている。一方で、八王子の場合、地域の自然、歴史研究の業績には大きいものがある。その両者をうまく結ぶことで、あまり事業に悪い影響を与えないように事務局として努力していきたい。

【藤田委員長】各部会の活動に多少なりとも障害となるようなことは避けたいというのが今の意見だろう。事務局の考えとしては、顧問や参与の方には大所高所のご意見をいただくということのようだ。協力員については具体的な作業を進めていく中でお力添えをお願いするということだ。

ボランティアについてはどういうことを考えているのか。

【佐藤室長】事前に養成講座を行い、事業の基本的な方向性は共有するような形で行きたい。一般市民の方で事業について関心のある方に10名程度ボランティアになっていただき、例えば個々に関心を持っている学問分野に取り組んでいただくような形になるかと思う。

【委員】佐藤室長としては、これまでの経験で得た人とのつながりや、団体などとのつながりの中で、市史編さんという八王子にとって大きな事業に、そういった力を反映させたいという思いなのではないか。八王子は広いし人口も多いので、多くの市民の力を借りながら従来の研究書などとは違う市民に開かれた市史編さんにしていきたいということだろうが、事務局としては大変になるかなと思う。

7. 閉会

【藤田委員長】今年度は5回の編集委員会を開いたが、いろいろと試行錯誤も多かったと思う。ただ、いろいろと具体的な活動も進んできてようやく事業も軌道に乗ってきたと感じている。新年度は予算も増え、事業を進める環境としては整っていくのではないかなと思う。できるだけいい市史が作れるよう、委員の皆さんのご協力をお願いしたい。

それでは、他になければ、これで本日の委員会を閉会する。

平成22年6月20日

会議録署名人 関 和 彦